



古典を読む

日本文化と思想と発見

はじめに

古典を読めば「いまを生きる力」が養えます！

「古典」と聞くと、思わず一歩引いてしまう人が少なくありません。特に、学生時代の授業で憂うつな体験をした人はそうでしょう。

しかしそれは、古典の言葉が現代語と異なるというだけでなく、年齢的に未熟だったため、せっかく学んでも中身がよく理解できなかったせいもあったはずです。

たとえば『徒然草』にしても『おくのほそ道』にしても『学問のすゝめ』にしても、読んで実感とともに理解できるようになるのは、社会人になってそれなりの経験を積んでからだと、筆者は思っています。

この講座で学ぶのは、単に教養としての古典ではありません。それを学ぶことが、現代を生きる私たちにとってどんな意味があるのか、という点を重視して、テキストは書かれています。言葉を換えれば、「いまを生きる力」として古典を読んでみようということです。

全体の構成は2部に分かれています。まず「第Ⅰ部 日本人は人生をどのように考えてきたか」では、先人たちによるさまざまな人生の捉え方に焦点を当てて、私たちの心にも受け継がれているはずの「原点」に想いを馳せてみました。

「第Ⅱ部 たくましい思想を『自分磨き』に活用する」では、社会人の自己啓発のために参考となる古典を集め、そこから濃厚なエキスを抽出して見ることに努めました。

福沢諭吉は『学問のすゝめ』の中で、社会人の実用に資する学問（＝実学）の重要性を説きました。このテキストでも、日々の役に立つ書物という観点から20冊を精選し、解説をほどこしました。

一読後に興味を感じ、ぜひ原典にあたってみたいという本が何冊も出てくるようであれば、筆者冥利、これにまさる喜びはありません。

さあ、心の準備体操をして、しっかり古典の海に泳ぎ出してください。

目

次

はじめに	3
第Ⅰ部 日本人は人生をどのように考えてきたか	5
1. 人生の不完全燃焼を戒める●『徒然草』吉田兼好	6
2. 最高の紀行文に俳諧の心を学ぶ●『おくのほそ道』松尾芭蕉	10
3. 「豊かさとは何か」を再確認する●『雨月物語』上田秋成	14
4. 和製論語と称された江戸時代の修養書●『葉隠』山本常朝	18
5. 武士道に息づく清廉潔白な精神●『武士道』新渡戸稲造	22
6. 後に続く者たちに「思い」を託す●『留魂録』吉田松陰	26
7. 健康に生きるための指南書●『養生訓』貝原益軒	30
8. 実学によって新しい文明を創造する●『学問のすゝめ』福沢諭吉	34
9. アメリカ人が見た日本文化の真髄●『菊と刀』ルース・ベネディクト	38
10. セクハラ問題を考える試金石●『平塚らいてう評論集』平塚らいてう	42
◆研究課題1	46
第Ⅱ部 たくましい思想を「自分磨き」に活用する	47
11. 一生を戦いに明け暮れるか、道を求めるか●『五輪書』宮本武蔵	48
12. 腹をくくって堂々と生きる覚悟●『海舟座談』勝海舟	52
13. 新しい世代の台頭を快く迎える●『謀叛論』徳富健次郎（蘆花）	56
14. 「実業界の父」が説いたビジネスの王道●『論語と算盤』洪沢栄一	60
15. 「職業とは何か」を若手とともに考える●『私の個人主義』夏目漱石	64
16. リーダーの流儀を学ぶわが国最高の啓発書●『努力論』幸田露伴	68
17. なぜ若者には厳しいしつけが必要なのか●『父・こんなこと』幸田文	72
18. 頭角を現す「異端児」の思想●『日本文化私観』坂口安吾	76
19. 「無私の精神」とはどう振る舞うことか●『無私の精神』小林秀雄	80
20. 日々の仕事を題材にして自分を語る●『一握の砂』石川啄木	83
◆研究課題2	87

第 I 部

日本人は人生を
どのように考えてきたか

1

人生の不完全燃焼を戒める

『徒然草』吉田兼好

●なぜ正面から人生論を語れないのか

辻井喬

だいぶ前のことになりますが、新聞の読書欄で興味深い記事に出会いました。^{つじいたかし}辻井喬氏の「人生論を読む」、サブタイトルに「笑う大人の方にこそ問題」というものでした。辻井喬というペンネームは、西武流通グループやセゾングループの代表を務めた堤清二氏のもの。経営に携わるかたわら、小説家としても活躍されたかたです。氏はその記事で「人生論のための読書」などという、現代の大人たちは、若者に笑われるような気分になるのではないかと指摘していました。

「人生論について何か言おうとしたとき、笑われそうな不安を覚えるのは、長年、自分たちの方がそういった問題を考えようとしなかったからではないのかという気がしてくるのだ。大人たちこそ、人生論といったら白けて笑うような暮らしをしてきているのではないかと。なるほど、これは穿^{うが}った指摘だと思いました。

大きくなったわが子を説教しようとして、思わず尻込みすることがあります。説教の内容が古くさいからというより、それを自分自身が実践していない負い目から。説教とともに「私を見習いなさい」と胸を張れないために、気後れしてしまうのでしょう。

人生論に
取り組んでいない

辻井氏の論点もこれと同じで、人生論などクサイと若者に笑われるだろうと思うのは、そう思う大人自身が、ふだん正面から人生論に取り組んでいないからだということです。本気で取り組んでいるなら、迫力と説得力を持って人生論の意義を語れるのではないかと。若者たちのほうも、そういう大人に対しては、主張の内容そのものには賛同しないまでも、敬意を払います。筋を通して人間に共感を覚えるのは、世代のギャップなどを超越した普遍的な人間の心理現象です。

筋を通して人間に
共感を覚える

「大人たちの多くは、自分の人生、そして社会における自分の役割はもう決まってしまうと考えているに違いない。口で構造改革を唱

え、グローバリゼーションを主張しているような人ほど人生論から縁遠い生き方をしているように見えるのはなぜか。変革の時代というのは、大人たちが人生論について考えなければならない時代のように私には思えるのだが」と、辻井氏は結んでいました。



『徒然草』
角川書店、2002

● 何度も繰り返される「名人の心得」

辻井氏が人生論の古典として掲げているのは、モンテーニュの『随想録』、トルストイの『人は何で生きるのか』、パスカルの『パンセ』、孔子の『論語』、そして兼好法師『徒然草』などでした。氏に敬意を表して、このテキストの1冊目として『徒然草』を取り上げることにします。

兼好法師『徒然草』

この本については、断片的な記憶をお持ちの読者が少なくないでしょう。世代を超えて、古典の教科書に必ず引用されていたからです。全242段から成るエッセイ集ですが、最もよく知られているのは第109段の「高名の木登り」でしょう。木登りの名人が、間違いなく木に登って降りる勘どころについて述べるエピソードです。

「高名の木登り」

「目くるめき、枝危きほどは、己れが恐れ侍れば、申さず。あやまちは、安き所に成りて、必ず仕る事に候ふ」

なにごとにも危険な箇所、難解な部分では当人がよく注意するから失敗は少ない。むしろ安全なところ、簡単そうなプロセスにおいて、人は油断や慢心からミスを犯しやすいと指摘しています。

この段に限らず『徒然草』には「名人の心得」を扱ったくだりがひじょうに多く見受けられます。一つのことでは頭角を現そうと思うなら、それ以外のことをすべて打ち捨てて取り組まなければならないと説く第188段などもその一つです。

名人の心得

「一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず、人の嘲りをも恥づべからず。万事に換へずしては、一の大事成るべからず」。なぜなら、どう生きたところで人の一生は短く、それをいたずらに嘆いている暇さえ人には許されていないからだ」と、兼好は言います。